

## 地域で支え合うまちづくりを

「子どもの貧困」「超高齢化社会」など、深刻化する社会問題に対して、地域で支え合うまちづくりが求められています。

2月14日、市総合文化会館において、標記の講演会が行われました。講師の作家、小檜山博氏は、1937年北海道滝上町生まれ。1983年、小説「光る女」で泉鏡花文学賞を受賞するなど活躍。また、JR北海道の月刊誌にもエッセーを連載しています。



根室市町会活動研修会講演会「地域に生きる」ひとりでは生きられない」講師・作家 小檜山博氏

小檜山氏は、講演の冒頭に「地域がしっかりしていないと（人は）生きていけない」と強調し、自分たちが楽しめるまち、イベントを見つけること、つまり「カメラと紙、鉛筆をもって、まちにある『良いもの』を探す」「北海道、根室で言えばそれは『自然だ』と述べました。氏は、大変貧しかった自身の生い立ちを紹介し、周囲に支えられて生きてきたことを述べました。高校時代には、『貧乏人』が集まる学生寮で生活していましたが、「空腹に耐えきれず、隣の畑からイモやカボチャなどを盗んで食べていた」そうです。寮生がみんなでするのやめるので、農家はたまったものではありませんが、貧しい学生たちのことを思いやり、その分余計に作物を育てたとのこと。

また、学費が払えず、食事のままならないときに、同室の後輩たちが自分たちの食事を少しづつ集めて氏に提供したことなども紹介し、多くの人の善意、優しさに支えられて今の自分があると述べられました。

### 「子どもの貧困」

最近、テレビや新聞などで「子どもの貧困」という言葉を目にします。貧困には絶対的貧困と相対的貧困の二通りがあります。

### 絶対的貧困

紛争や自然災害、貧困によって学ぶ権利を奪われている子どもたち。飢えに苦しみ、命さえ保障されない。到底人間らしく生きられない極度の貧困。

### 相対的貧困

経済的な理由で食費が制限される、病院にも行けない、進学もできない。その社会の「普通の生活」ができない。

（以上、「しんぶん赤旗」2016年9月6日付「潮流」より引用）

あくまでも筆者の考えですが、貧しい開拓農家に生まれた小檜山氏は絶対的貧困に近かったのかもしれないませんが、苦学しながらも高校、大学に進学したことから、相対的貧困といえるのかもしれませんが。

いま、問題になってるのは、相対的貧困の子どもたちです。経済的な理由で進学できない、食事のままならない子どもたちが、全国的に増加しています。そうした子どもたちを支えるために、学習の場を提供する「無料塾」や食事の場を提供する「子ども食堂」などの取り組みが、いま、全国各地で広がっています。

党市議団は、「子どもの貧困」対策について、早くから議会で取り上げてきました。根室市での実態調査はまだ行われていませんが、道では昨年の10月～11月に調査を実施し、この度その速報値が公表されました。今後の分析と、それに基づく対策が急がれます。

今求められているのは、実態調査もさることながら、現在困っている子どもたちのために様々な支援の対策をとることにあると考えます。特に、経済的な理由で進学をきらめることがないよう、子どもたちへの学習支援の実施は重要であり、党市議団の求めに対して、市も実施を前向きに検討しています。

「市議団ニュース」1818号（2016年10月23日）で紹介しましたが、福岡県大牟田市では、認知症の高齢者を地域で見守る取り組みが広がっています。小檜山氏が講演で述べていたように、基本的には人の優しさが「地域で支え合うまち」をつくっていくのだと思います。支え合うことによつて、支える側にも支えられる側にも優しさが育まれるのではないのでしょうか。

